八期歴史会往来第30号　　2019 年11月1～11月31日()

（29 号後編）

●歴史通信担当　大石よりみなさんへ。前号挨拶以下

苦難の朝鮮出兵の①～④を９月末にお送りしました。今回まだ 10 月中旬ですが後の⑤～⑧が終わりました。

歴史往来のメールも掲載に応じていろいろ会話や隈元氏の詳しい説明などもありますので今回少し早いけど前半号をお届けします。　すごい台風が又関東方面を襲いそうです。

このところ台風銀座と、かって言われた鹿児島はそれてばかりで申し訳ありませんがこれは地球変動の結果なのでしょう。中部・関東にお住いの八期のみなさん！お気を付けください。

添付の「苦難の朝鮮出兵」はもたついていた庄内の乱（都城市付近）も家康の口入でやっと落ち着いたかと思ったら、いよいよ日本史の特大イベント「関が原」1600 年がまじかに迫っています。

⑧の最終版は・・・・・・５月 12 日、「おいの豊久が義弘の呼びかけに応じて砂土原を発った」で終わりました。

　今、若い人の間では戦国武将がブームになっていてこの４男家久の子豊久が大人気だそうです。

島津にとりわけくわしい隈元くんの案内で先日、家久の墓所のある天昌寺跡を訪ねてきました。

さて連載【島津義弘 400 年】の次回からの展開がたのしみです。

維新の偉人たちに較べ長生きしている義久・義弘を初めその子供たちも年齢から行動を想像しやすいのがいい感じです。

●別件ですが、転送します。

古市さんが、先日のことを喜んでくれた様子が伝わってきます。

文中、大友氏となっているのは、大石くんのことでしょう。

　今日は、午後　「鹿児島県お母さんコーラス合唱祭」を聞きに出かけます。

クマモト　タツオ

●From: **本田　哲郎** <t15honda@ml.satsuma.ne.jp>

Date: 2019 年 10 月 10 日(木) 23:20

Subject: 古市氏からもお手紙いただききました！！

To: 隈元達雄 <takumamoto2@gmail.com>

●隈元　達雄　様

　夜が遅くいなりましたので、メールします。

　今日は古市氏からも丁寧なお礼状と貴重な書物が送られてきました。

それは、「宝暦治水」のことが昭和 45 年に発行された「血流」という書物で、彼が過って、宝暦治水の現場にった時、現地の方から感謝されてこの「本」を送られたそうで、それ以来、ずっと保持していたが、天昌寺跡での宝暦治水の話を聞いて、小生に送ることにしたとの事です。

まだ読んでいませんが、読了したら、感想を添えて、古市氏にご返事を送りたいと思っています。

　アチラの方々は、宝暦治水のことでは、鹿児島の人間とわかれば、どこでも濃尾平野で稲作ができるようになったのは、「薩摩人」の努力にあると我々も何回も行っていますが、行く度に、口々に感謝されます。

　大友氏も豊久公や南郷城址などに興味が湧いて来られたようで、嬉しい事です。

今後も来ていただく方々に永吉地区の歴史豊かな有様を宣伝し、また島津家のスゴサを語り続けてゆきたいと願っています。

14 日は伊敷公民館（午前 10 時から）での「島津家久の生涯」について発表させていただく事になっています。　　素人の説明者ですが、家久公の「謎の死」については、識者のイロイロな「説」を並べながら、自分なりの見解を大胆に述べるつもりです。（ハイライトのつもりです）ご都合がついたら、是非お出かけください。　　2019，10，10。　　本田　哲郎

○ありがとうございます。
その節はよろしくお願い致します。
　今日は、本田さんの歴史講演会に行ってきました。
詳細は、また報告します。
　今日はこれからお通夜が２ヶ所であります。
今朝の新聞に二つ並んでいた死亡広告です。
一人は同期の医者で、もう一人は後輩の奥さんです。
両方とも同じトップテノールで、後輩は玉龍の後輩でもあり、同じ武岡の住人であり、弟の同級生でもあります。今日明日葬式まで忙しいです。　　クマモト

○１０月１３日
森くんの治療は１０月の２０何日かに終わると聞いていますので、１０月末頃に誘ってみましょう。
その頃になると、森くんも自分なりの体調把握ができるのではと思います。
森くんが行けない場合は、JR で帖佐駅まで行けば、私の計算では７００ｍくらいで公民館があるはずです。
西くんに来てもらうなり、臨機応変にできるのではと思います。
　大石案の日程は、昼食時間等を考えると無理かもわかりませんが、講演会の後に展示会を見て、その後 2，３箇所は回れると思いますよ。
あの近辺は私は JR で行って、たくさんの史跡を歩き回ったことがあります。
クマモト　タツオ

○10 月 18 日
大石さん　こんにちは
　先月の四国旅行から福岡大会などまで、盛りだくさんの内容の動画楽しめました。ありがとう。
でも古いものほど、あの人もこの人もと鬼籍に入った方も少なくなかったのは残念でした。
まあこれが人生というものでしょうけど。その意味で、まさにこれからは今まで以上に
一期一会の感慨一入となりますね。それだけに貴重な出会いを疎かにしてはならないとの
気持ちを強くした次第でした。。
　来年になれば、存命の全員が 80 台になります。郷里で傘寿の会をご検討願えれば幸いです。
元気に顔を合わせることが最大の目的であり、大げさにやる必要はないと思います。
　例えば、一案として、対岸の桜島荘？（国民宿舎）を会場とし、翌日は希望者で黒酢の里（福山町）
を桜島伝いに訪ね、壺畑を眺めながらレストランでランチといった企画などもよいのでは。
　四国旅行から足を延ばし帰鹿した際、初めて黒酢の里を案内してもらいました。雄大な桜島の品の
よい後姿と広大な壺畑（56 千本の黒酢の甕）を眺めてきました。広いレストランは 10 年前のオープンとは
見えないぐらい垢抜けした感じで、ランチ(手ごろな値段で美味)も楽しめ、ひと時をゆったりとした気分で
で過ごせました。黒酢をベースとした諸々の健康食品のお土産類も豊富です。、
　ご参考まで。　　佐倉市　古市

〇古市氏の郷里に縣ける思いは凄いものがありますね。
彼が以前から言っていた「鹿児島での最後の同窓会」に思いを寄せる気持ちが改めて伝わってきました。
　軽々には言えませが、彼の思いを考えると「鹿児島での傘寿同窓会」もありかなと思うようになりました。それも大人数になると、世話する方も大変なので、３０人～４０人くらい（それでも多いとも思いますが）規模のもので十分でしょう。
しかし、実際やるとなると、５０人～６０人くらいは集まるのかなとも思います。そうなると、当日までの人の出欠の動きや、当日の世話を考えると大変だし、もうやめたほうがいいかとも思い、気持ちが揺れ動きます。
　古市案のいいところは、場所です。「レインボー桜島」や黒酢の「かくいだ」のレストランは手軽でいいですね。「かくいだ」には家内が以前行って、大変良かったと言っていました。
　いずれにしても、やるとなると相当な覚悟が必要でしょう。ここはやるか、やらないか、考えどころだと率直に思います。　クマモト

〇そうですね。
先ほど、本田様には御礼のメールを出しました。
この前の四国旅行でも、彼の推薦する「阿波踊り会館」をコースに取り入れました。実はその為、有名な高松の「栗林公園」が除かれました。
個人的には日本の公園の中で昔から一度は行っておきたい公園の一つでした。
四国に３度行きましたが栗林公園と四万十川だけがまだ訪れていません。
古市くんの提案なので阿波踊り会館も正解でしたが、２者択一はむずかしい判断になります。・・・・
今回の、古市くんの貴重な提案を受けながら僕もいろいろ考えることでした。
来年の傘寿（おそらく本当に最後のタイトル付き会のイベント）記念の実践は皆の潜在希望かもしれませんね。
森くんが頑張ってもらうことになると思うのでそのうち彼の体調を見ながら「ひとまず克服会」を兼ねて会いましょう。　オオイシ

〇ご無沙汰しています。森です。
世間はだいぶ秋めいてきました。私も３５回の放射線治療のうち今日で３０回終わりました。あと５回通院で治療は終了しますが３１日の主治医の判定がどうなるか癌消滅を期待しているところです。
　照射治療時間は正味５分くらいで終わりその間痛くも痒くもないのでちょっと物足りない気がしますが２０回を超えるころから放射線の影響が出てきて下半身がだるくて、歩いても宙を歩いているような気分になり外出する気分になれない状態です。治療が終われば１週間ほどでもとに戻るそうですので後しばらく頑張っていこうと思っています。
古市君提唱の傘寿の旅行の件ですが、小生としては今年最後になって参加皆勤の記録が途切れて大変残念な気持ちなので来年最後の最後として県内での傘寿記念同窓会を開催することに賛同します。
霧島１泊でもいいのではないでしょうか。
八期メール、ライン仲間の機運を徐々に盛り上げていって来年秋ごろの開催を期してまた話し合っていきましょう。
2019 年 10 月 18 日(金) 12:44 大石慶二

〇森くんの霧島案に賛成です。
新しく星野リゾートも出来たのでは？

人生最後の「高千穂登山」行けるところまで。
〇いつもありがとうございます。

つれづれのネットサフィンで、たまたま、下図の絵に遭遇した。絵図の説明はなかった。
多分、関が原合戦を描いたものだと思われる。薩摩の紋所の１つが赤く描かれている。
他にもいくつか赤く描かれたものがある。本陣か大将を示すものであろうか？

クマタツさん　解説をお願いします。
〇さて、記事の最後に、南日本政経懇話会の例会でサポッロビールの文化広報顧問が講師とある。
となれば、当然、村橋久成の話でしょう。
村橋は言わずと知れた薩摩藩英国留学生の１人。開拓使麦酒醸造所（サッポロビールの前身）の設立に参加。黒田清隆の下、北海道開拓事業の指導者として、明治 10 年１月、開拓権少書記官という高位の役職に就いた。ところが北海道官有物払下げ事件が起こった。村橋は、虚偽と策謀が渦巻く官界に耐えられず、明治 14 年５月６日、官を辞して、雲水として諸国行脚に旅立った。その後、明治 25 年９月 28 日、神戸市で行路病者として死亡するまで、家族や友人との連絡を絶ったという。

西山 和宏
〇この図の実物大の屏風絵を先日黎明館で観てきたばかりです。あの赤い㊥のすぐ上には島津義弘の字がありました。右横片手ついて何やら報告している武士も名がついていたように思います。なぜこの絵のこの部分に記憶があるかというとすぐ横にこれと同じシーンのずっと小さな絵がありました。同じシチュエーションなのに随分絵が違いました。為に何度も何度も二つの義弘の図を見比べました。そばにいた隈元くんに言えば良かったと、今思います。偶然の貴兄からのメールでした。

〇確かに昨日見ましたが、大石くんが言うように詳細には見ていません。
丸に十の字の旗指物の黒だけが印象に残っています。赤は気が付きませんでした。
「知恵袋」などで調べてみましたが、適格な答えは見いだせませんでした。

　絵にあるだけでも３種類あって、カッコいいですね。普通のはともかく、あとの２種類はどういう役目を果たしたのでしょう。

〇これまた　先ほど　遭遇しましたものを添付します。

元は、岐阜市歴史博物館が所蔵し発行したもので

素晴らしいものです。

じっくり読む前に送ります。

〇メール返信遅くなりました。
絵巻は先の便でも届いていましたが、後の方が大きくてよりわかりやすいです。

毛受勝助の討ち死に図
島津の馬印でしょうか。赤地に金の丸に十の字。
関ヶ原の戦い
小西陣へ攻め入る東軍
白地に黒の十の地
島津の退き口以上４ついずれもいい絵巻ですね。印刷して保存しましょう。
クマモト

〇久しぶりに 夢中的中国回憶（中国ぶらり旅）を作りました。
8 年ほど遡っています（実際よりは 17 年も前の 60 代初めの頃です）。
まぁ今と気分も、（体力はちょっと落ちてますけど）変わらないつもりですが。
いやぁ、見た目は変わって（老化）いますけどね。

添付ファイル エリア
YouTube 動画 夢中的中国回憶（中国ぶらり旅）㉗『黄山の日の出』 をプレビュー

〇朝日を見たということは

夜明け前に登山開始ということ！
ラストの１枚がよかったよ！
西山 和宏

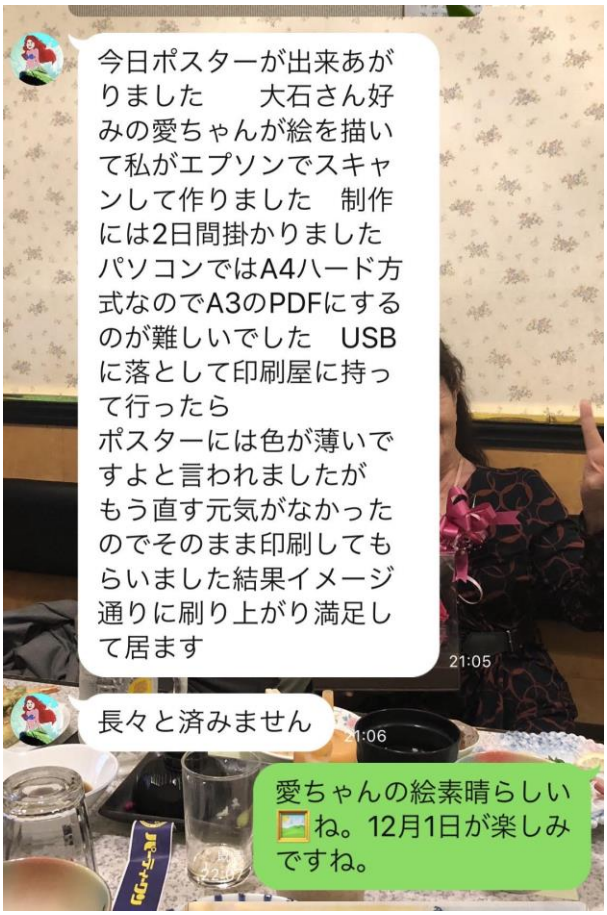
〇大石くんは自分一人だけで一生懸命中国詣でをしていたと思っていたが、ちゃんと抑えるところは抑えていたのですね。(笑)
ちょっと、ホッとして、こちらも嬉しくなりました。
〇大石さん
こんばんは
ありがとうございます。懐かしく見ました。
２００４年に　黄山へ　家族旅行　されたようで　良い思い出でなったことでしょう。
私も　少し前　１９９９年に　家内を　日本から　呼び寄せ（　江蘇省南通市に　１９９７年より２年半合弁企業に出向中）　黄山登っています。
墨絵　ぴったりの　岩山風景　なかなか　変化のある　山上で　健脚でなければ　なかなか　見物できないような　ところだったと記憶しています。木場　祥雄

〇久しぶりに 夢中的中国回憶（中国ぶらり旅）を作りました。
８年ほど遡っています（実際よりは 17 年も前の 60 代初めの頃です）。
まぁ今と気分も、（体力はちょっと落ちてますけど）変わらないつもりですが。
いやぁ、見た目は変わって（老化）いますけどね。-

〇黄山はよく聞きますが、その朝日をご家族で拝むというのはいいですね。
山の上は大賑わいで、中国語？　が飛び交っていましたが、大石くんはよくわかるのでしょう。
先日、テレビで富士山への外国人の装備も整わない無謀な登山ぶりを見ましたが、あれに比べれば、黄山に登る人は心がけがいいように見えました。

昨日はグラウンドゴルフ、今日は校区の町内会対抗の運動会と忙しいスポーツの秋を楽しんでいます。
運動会では６種目に出場して、大きなゴミ袋を１年分くらい商品としてもらいました。せっせと終活の片付けをしなさいということでしょうか。宝釣りも大きな袋入りの大量の商品をゲットしました。
クマモト　タツオ

〇木村フラのご案内



○西山レポートをお送りします。
https://mail.google.com/mail/u/0?ui=2&ik=1b3f5184ee&attid=0.1&permmsgid=msg-f:1647917669695492065&th=16de9463b94a0fe1&view=att&disp=inline
○大石さん
こんにちは
先週　バタバタして　おりまして　今日　久しぶりに　ゆっくり　送っていただいた　メール見た次第です。
薩摩藩の歴史資料　初代の墓から　久光公　迄　懐かしい　福昌寺　近くに　生まれながら　常安墓所　初めて　見ました。
まあ　いろいろと　見せて　もらい　薩摩藩の歴史の勉強に　なります。
 ありがとうございました。
木場　祥雄
○https://www.youtube.com/watch?v=sdEXAhSAcV0&authuser=0

○大石くん、西山さんありがとうございます。
島津の墓所巡りはよくまとまっていて、これまでの墓所めぐりを思い出しながら見ました。
島津家５代当主までが眠る出水の感応寺には、私はまだ行ったことがないので、興味津々で見ることでした。
その他、５代までの墓碑は鹿児島市清水町の私が昔住んでいたすぐ近くの本立寺跡（五道院跡）にもありますから、いずれ一緒に行きましょう。
鎌倉市の白旗神社の裏山などにもあると物の本には書いてあります。それによると、鎌倉市のものは源頼朝の墓碑の近くにあり、薩摩藩第８代藩主・島津重豪（しげひで）が大規模な修復を行ったことで名高いとあります。さぞかし立派なものなのでしょうね。

　今日は大石くんほか１名の３人で黎明館で開催中の　島津義弘没後４００年記念展「戦国島津」　を見てきました。
南日本新聞の連載記事などでいくらか勉強をしましたので、実際に古文書や古地図、鎧兜を見て感慨も一入でした。
東大所蔵のモノから個人所蔵のモノなど日頃見ることのできない、国宝をはじめいろいろなものを見ることができました。
最近は県内各地で義弘に関する講演会や展示会が数多く開かれています。おかげで年内は大いに楽しめそうです。

クマモト　タツオ

2019 年 10 月 16 日(水)

　○いつもありがとうございます。

有意義、かつ楽しそうな史跡巡り、関が原合戦絵図の「丸に十の字」を見て、あれは単なる家紋ではなく、武勇を誇る旗印であることを思い出しましたので下記を記します。

2016 年３月 30 日、有志数名で、東京大田区洗足池に西郷隆盛の留魂碑と勝海舟夫妻の墓を訪れまし。その時に書きましたものを再掲します。 洗足池には、予期していなかった名馬「池(いけ)月(づき)」の像があった。「池月」は、宇治川の先陣争いで「磨(する)墨(すみ)」とともに知られる名馬である。

平安末期寿(じゅ)永(えい)３年（1184 年）１月、鎌倉の源頼朝から派遣された源義経と木曾義仲が、京都近郊の宇治川をはさんで対峙したとき、義経軍は敵方から浴びせられる矢をものともせず渡河を強行した。そのとき義経配下の佐々木高綱(たかつな)と梶原景(かげ)季(すえ)が一番乗りを競った。これが、世に名高い「宇治川の先陣争い」である。

「池月」騎乗の高綱は、渡河の途中、先行する「磨墨」騎乗の景季に「馬の腹帯が緩んでいる。締めなおせ」と声をかけた。景季は馬を止めて、腹帯を締めなおした。その間に、高綱は追い抜いて、先陣争いに勝利した。「池月」「磨墨」ともに頼朝から拝領の名馬であった。

鹿児島の開聞岳の近くに九州最大の池田湖がある。池田湖は日照り続きでも水量が豊かで、風がなくても突然、大きな波がたち、湖底には龍が棲んでいると恐れられ、人々だけでなく、鳥や獣も近づかなかったという。ところが、開聞岳の麓で育った白馬の母馬と仔馬の２頭は、毎日のように、池田湖へやってきて、白いたてがみをなびかせながら、並んで対岸まで泳いでは戻ってきた。

その様子は、白竜が並んでいるように見えたという。竜宮からきた竜馬の子孫だともいわれた。この噂は遠く離れた鎌倉まで聞こえ、頼朝から献上を求められた。仔馬だけ鎌倉に連れていかれた。

母馬は仔馬が連れ去れた方角に向かって悲しげな鳴き声を立て続け、さびしさのあまり何も食べなくなった。それから７日目、母馬は仔馬と泳ぎを楽しんだ池田湖に飛び込み、中ほどまで行くと、幾度か弧を描いて泳ぎ渦巻きを起こし、やがてその中に消えていった。仔馬は頼朝のもとで、「池月」と名付けられた。

これは、私が、幼いときに聞いた鹿児島に伝わる伝説である。「池月」は、武者絵でも白馬として描かれている。

これには次のような伝説がある。

「宇治川の先陣争い」の４年前の治承(じしょう)４年（1180 年）、頼朝は源氏再興の挙兵をしたが、石橋山の戦いに敗れ、鎌倉へ逃れた。その途中、洗足池の畔で宿営し、後続諸将の到着を待っていた。そのようなとき、どこからともなく１頭の馬が大きな嘶(いなな)きとともに現れた。その馬は、馬体は逞しく、蒼い毛並みに白い斑点を浮かべていた。「池に映る月影のよう」であったことから「池月」と名付けられ、頼朝の乗馬にした。白馬が月の光で蒼く見えたのであろう。それほどの名馬に飼い主がいないはずはない。頼朝は、この名馬の出現を平家との戦いに勝利する吉兆として、征旗を高らかに掲げた。ということから、千束八幡神社は「旗上げ八幡」と呼ばれている。

　世に言う源平合戦、治承・寿永の乱（1180～1185）で、島津家初代当主忠(ただ)久(ひさ)は、平家追討での武勇を称賛され、馬の轡(くつわ)をかたどった「丸に十」の字の紋所を与えられた。以後、島津家は武勇を誇る印として、「丸に十」を用いた。

https://mail.google.com/mail/u/0?ui=2&ik=1b3f5184ee&attid=0.5&permmsgid=msg-f:1647971146011698319&th=16dec506a61ee48f&view=att&disp=safe

　島津家の元々の紋所は「鶴丸」、鶴丸城はこれに由来する。

西山 和宏

○https://www.youtube.com/watch?v=MyLfY27mRak&authuser=0

アジアん鹿児島 2019

１４回目とは素晴らしいですね！

三六歌仙の扁額とはさぞかし大変なものでしょう
食い物の恨みは恐ろしいといいますが飲み物はさらなるものかもしれません。
墨書されものが、朽ちることなく残っているのは、現代のコンピュータよりも保存度がよいのでしょう
などと思いました。　　和宏

○大石さん
こんばんは
郡山八幡神社　にまつわる　資料　メール　ありがとうございます。
余談ですが　大口市には　今でも　美味しい　焼酎が　あります。　１５４９年に　初めて　作られた
大口酒造の　伊佐錦　など　いろいろあり
先般　四国旅行で　伊佐錦　黒　持っていきました。
　　関西では　すこし　プレミアム　ついています　伊佐美（１．８L）５，０００円　などがあります。
伊佐錦　は　飲んでいます。美味しい焼酎です。
アジアン鹿児島２０１９　も　興味深く　読みました。
木場　祥雄

○今朝送った「風土記・伊佐編」後ろに「義虎の妻は球磨相良氏の娘で」とあったので、アレ戦国島津家系図に義虎の妻は義久の娘の『御平』だったはずと思い、丁度先日古本市で買った本で調べました。解決しました。紙面（東哲郎）は正しいでした。

○薩摩各地に伝わる歴史を知らしめて、披瀝してくれる「鹿児島風土記」はいつも知らないことが多く、浅学非才の自分にとっていい勉強のヒントになっています。それぞれの地域にはよく調べている人がいるものですね。
　今日は大石くんの史料調査がいい勉強になりました。私は何気なく読み過ごしていました。ありがとう。
系図には書かれていない、裏の隠された事実は他の文書で調べるしかないですね。
クマモト　タツオ

○いやはや、暇つぶしとはいえ　大したものです
世に権威者と言われている人でも結構、出鱈目ことを書いていますからときとして確認したくなるでしょう。
西山 和宏

○今朝送った「風土記・伊佐編」後ろに「義虎の妻は球磨相良氏の娘で」とあったので、アレ戦国島津家系図に義虎の妻は義久の娘の『御平』だったはずと思い、丁度先日古本市で買った本で調べました。解決しました。紙面（東哲郎）は正しいでした。

○ 私も改めて「豊臣側からの毒殺説」の「島津奔る」上巻　池宮彰一郎の１９７ｐ～１９８ｐを読み返して見ました。以下がそうです。これを読み返して見ると、先ほど私が書いた、もっともないだろうという豊臣側からの毒殺説も有力になってきますね。まさに西山さんの言う通りです。大石くんの買った本や他も見てみる必要がありそうです。　クマモト　タツオ

○おはようございます。
いやはや　研究の深さに感心します。
添付の２頁、肝心なところだと思います。
それから察して、家久の殺害は伊集院忠棟の求めによるものでしょう。
有名な話があります。
秀吉は簡単に人質を殺害するような性格ではありません。
秀吉は、織田信長の命により黒田官兵衛の嫡男松寿丸を人質として長浜城に預かった。子供いない秀吉夫婦は可愛がった。
謀反を起こした荒木村重を説得に使わされた官兵衛は囚われ、戻ってこなった。信長は裏切って村重についたと思い、松寿丸の殺害を秀吉に命じた。
ところが、松寿丸は密かに竹中半兵衛の居城に移し匿われていた。後に、村重は退治され、
官兵衛は土牢から救出された。
秀吉は人情の機微を熟知し、人質は生かして活用するタイプであったと思います。

○私も諸説を全部読んでいないので、確たることは未だ言い切れない段階です。ただ、豊臣側からの毒殺説だけは、前後の関係からしてないのではと思っています。　クマモト

○買いました。 家久の死を**「島津側の毒殺説」とした山元泰生**の文庫本です。なぜ買ったかと言うとこの説を本田哲郎さんがとっているから興味を持ちました。隈元くんはどの説ですか？ちなみに山元博文著『島津義弘の賭け』は病死説でした。　けいじ

○大石　慶二　様
「鹿児島市日中友好協会」のに関する種々の資料や動画を拝見しました。
びっくりです。
ネットで協会活動などを拝見して、貴兄が理事長として努め乍ら、諸々なイベントや活動を活発にされておられる事、素晴らしいことですね？！
最近の記事では中国語コンテスト」までやっておられますね？！　また留学生などの援助なども励んでおられる由、さすがです。

　また、旅行記の動画もゆっくり拝見しました。
本当に珍しく、初めて見る風景でした。中国でも奥地の貴州省貴陽市や江西省三清山などの動画、特に三清山の山頂付近にそそり立つ岩山というか塔のような岩には驚きました。
 機会があれば、是非、また当地へもお越しください。

　　２０１９、１０、２２、　　本田　哲郎

○大石です。
本田様の「ファミリーストーリー」をたのしく読ませて戴きました。
台湾料理は中国（ぼくのしばらく滞在した長沙市）でも他のご当地料理よりワンランク上に位置していました。
もちろん値段も高かったように覚えています。華南の料理は辛すぎるのが多いのでホッとしたものでした。
「新竹ビーフン」は初めて聞く名前ですが山形屋も近いので一度訊いてみようと思います。

さて、本田様の講演資料をじっくり読ませて戴きました。第２章の５『家久の「謎の死」の考察』興味深く読みました。
本田様の採られる「D の説」ー島津側からの毒殺説ーに興味がそそられました。
早速、資料の一つ「島津家久と島津豊久」ー山本　泰生（人物文庫）を Amazon に注文しました。
ちなみに隈元氏は C の豊臣方からの毒殺説だそうです。
まぁ結論は出ないのでしょうが歴史は「謎解き」が面白いですね。

11 月 16 日午後２時から姶良公民館で東京大学の山本博文教授の記念講演会があるので隈元くんやらと聴きに行くのでチャンスがあったら氏の考えも訊いてみたしと思います。

○本田さんは、熱情家というのでしょうか。ほんとうに熱い人です。
私も知り合って３年強くらいですが、いつも熱さを感じさせる人です。
好奇心も強く、大石くんの日中友好協会にも大いに興味を持たれたようですね。
　本田さんは、自分の出自を自分から言う人ではないので、周囲の人から聞いた話です。
それによると、島津貴久の側目となって島津４兄弟の末弟・家久を生んだ母親の父親・本田親康の一族だそうです。
そこでネットで調べてみました。すると、父親の本田親康が戦死したため母の実家で育ち「肥知岡」姓を名乗ったようです。
　本田氏はもともとは、薩摩、大隅の国人。北郷氏や伊東氏とも血縁関係を結び勢力を誇ったが、島津に圧されその配下になった。本田哲郎さんの先祖は、前期佐土原家の島津家久やその子供の豊久に仕えていたが、後に永吉島津家となったので、本田家も永吉に地所を与えられてついてきたものと思われます。
　　クマモト　タツオ

○いろいろな方がおいでになるものですね
時として、歴史と繋がることがあるものですね
これもまた、熱烈な知人・友人でしょう
それもあなた故、ということでしょう。　　西山 和宏

○家久の死を「島津側の毒殺説」とした山元泰生の文庫本です。なぜ買ったかと言うとこの説を本田哲郎さ

んがとっているから興味を持ちました。隈元くんはどの説ですか？ちなみに山元博文著『島津義弘の賭け』は病死説でした。　　大石

○私も改めて「豊臣側からの毒殺説」の「島津奔る」上巻　池宮彰一郎の１９７ｐ～１９８ｐを読み返して見ました。以下がそうです。これを読み返して見ると、先ほど私が書いた、もっともないだろうという豊臣側からの毒殺説も有力になってきますね。まさに西山さんの言う通りです。大石くんの買った本や他も見てみる必要がありそうです。　　クマモト　タツオ

○おはようございます。
いやはや　研究の深さに感心します
添付の２頁、肝心なところだと思います。
それから察して、家久の殺害は伊集院忠棟の求めによるものでしょう。
有名な話があります。
秀吉は簡単に人質を殺害するような性格ではありません。
秀吉は、織田信長の命により黒田官兵衛の嫡男松寿丸を人質として長浜城に預かった。子供いない秀吉夫婦は可愛がった。
謀反を起こした荒木村重を説得に使わされた官兵衛は囚われ、戻ってこなった。信長は裏切って村重についたと思い、松寿丸の殺害を秀吉に命じた。
ところが、松寿丸は密かに竹中半兵衛の居城に移し匿われていた。後に、村重は退治され、官兵衛は土牢から救出された。
秀吉は人情の機微を熟知し、人質は生かして活用するタイプであったと思います。西山
○大坂夏の陣図屏風(黒田屏風)右隻（大阪城天守閣所蔵）

○西山さん

グラウンドゴルフから帰ってきて、PC を開いたところ、2通のメールが入っていました。

いい情報をありがとうございます。
貴兄こそ研究熱心です。いつもそう思っています。

いい逸話ですね。秀吉のいいところでしょうか。人情家でもあったのでしょう。

島津家久の死については、これからも調べてみましょう。
昨日添付した「島津奔る」は、他の部分ではかなり小説風の脚色もあるので（例えば、義弘が部下の中馬大蔵の妻との不義密通したことなど）家久の死の部分も或いは史実から離れているかもとも思ったりもします。こうした読み物もどこまで読み込むかつくづく難しいものだと思うことです。

クマモト　タツオ
○　　10月25日　大石さん　おはようございます。

先日は思いがけない贈り物、嬉しくありがたく拝受。心に掛けて頂き感謝、感謝です。
2，３日前も西郷、大久保本を注文したところでした。大久保さんのことを調べるためには西郷さん抜きにはできないので。しかし、書店で入手できないこうした書籍は貴重です。年表も参考になります。よくぞ見つけてくれました。
それにしても、地元で不評と言われてきた大久保さんに関する読み物が、識者の手により上梓されていたとは意外でした。没後 100 年を記念し、西郷さんと双璧の郷土の偉人を見直そうとの機運が盛り上がったのでしょうか。それとも盛り上がらないので、まず青少年から啓蒙しようということだったのでしょうか。
この本は大久保さんの一代記として、平易な文章に加え写真や絵などをふんだんに挿入して、読み手が途中で投げ出さないよう、よく工夫されていると感心しました。執筆者が地元の方々であればこそ、郷中教育の一環としての「降参言わせ集団競技」などは目新しい視点でした。こうした動向を背景に、没後１０１年目にしてやっと銅像も建てられた訳ですね。
今後、ライフワークとして（やや大げさながら）、大久保さんの研究に取り組んで行くつもりですが、その狙いは「西南戦争の真実」の解明です。それができれば、歴史の見直し、ひいては大久保さんへのいわれなき誤解、偏見など霧散霧消すると考えています。ただ、そのためには、納得してもらえるよう膨大な資料の渉猟が必要であり、老兵にその時間が許されるか懸念されるところです。
今後ともご声援、よろしくお願いします。
佐倉市　　古市

○やっと「島津義弘　没後４００年　クマタツの想い③」を書いてみました。もう思考力も衰えてさっぱりです。次回はいつになるやら・・・。
今日は先日の本田哲郎さんの講演会のことをブログ化しました。
いつもの「クマタツ１８４７」です。よければご笑覧ください。　　クマモト　タツオ

○島津義弘　没後400年シリーズに寄せて　　クマタツの想い
その三　島津貴久までの波乱の家督継承　　2019、10

　島津氏は初代忠久に始まり、明治維新まで７００年間、日本でも稀有な一つの系統で継承ができたとされているが、決してそうではなかった。
島津氏５代貞久までは直系で守護職を継承してきた。しかし貞久は延文４年（１３５９）になると、３男・島津師久に薩摩を、４男・島津氏久に大隅を継承するが、ここから変化が始まった。その両方が６代を名乗り、本宗家の師久の系統は「総州家」、氏久の系統は「奥州家」と呼ばれた。師久と氏久のときは兄弟力を合わせて南朝勢力と戦っていたが、氏久の子７代元久のとき、総州家の師久の子伊久（これひさ）と争い城を清水城に移し、応永８年（１４０１）伊久と戦い、これを破り、同じ１４年には、薩摩、大隅、日向３ヵ国の守護職を兼ねるに至る。ここに二人の守護の時代は２代で終わることになった。

薩摩国守護職を失った総州家は伊久の子、守久らが薩摩北部で抵抗を続けるが、次々と拠点を失い、永享２年（１４３０）守久の孫、久林が９代島津忠国から攻め滅ぼされたことにより、総州家は滅亡する。一方で島津家は、総州家と奥州家だけでなく、庶子家（分家）も生まれて「御一家」と呼ばれていた。古くは４代忠宗の弟・久長から伊作島津家が生まれており、その後、９代忠国の弟久逸（ひさやす）が入っている。
また、８代久豊の子で９代忠国の弟用久から薩州家が始まり、忠国の子１０代立久の兄友久から相州家が始まっている。こうしたこともあって、室町末期の島津家は、一族同士の反乱や有力国人との争いが絶えることがなかった。
永正３年（１５０６）には、島津家当主１１代・忠昌は南九州の騒乱の中で体調は優れず、同年には大隅の肝付氏を討とうと出兵するが失敗し、遂に精神にも異常をきたした。守護に就任以来、島津本宗家の権威回復を図るべく、領国内の争乱に出兵して平定を試みた忠昌だったが、居城清水城にひきこもるようになり永正５年（１５０８）遂に自害してしまう。享年４６歳という若さだった。

ついで忠昌の子、１２代忠治も２７歳で亡くなるなど、危機的状況が続いた。忠治の弟、忠隆が１３代となったが、嗣子がなく２３歳で没し忠昌の３男、勝久が永正１６年（１５１９）に１４代の家督を継ぐことになる。
島津本宗家１４代勝久のとき、妻の弟で薩州家の当主である島津実久が実権を握りはじめ勝久と争いになった。困った勝久は伊作島津家の忠良（後の日新公）と手を結び、対抗する。そのために忠良の子、貴久を継嗣に迎えた。
そういう見方の一方、新名一仁氏はその著書「中世島津氏研究の最前線」の中で「従来の近世薩摩藩によって形成された史観を克服しつつ、新たな歴史像が構築されつつある。その最たるものが、相州家島津忠良（母親常磐の相州家島津運久との再婚による）・貴久父子による島津本宗家継承・奪取とそれにともなう戦国大名化であろう。最終的にこの系統が近世大名化するのであり、その支配の正当化のために家譜類が編纂されていく」という見方をしている。
　島津忠兼（のち家久）の本宗家から家督を継ぎ清水城（鹿児島市）にいた島津貴久も安泰ではなかった。大永７年（１５２７）５，６月頃になって忠兼と手を組んだ薩洲家、島津実久の使者が守護職返還を要求し、聞き入れなければ武力行使に出ると伝えてきた。
その後の経過については、南日本新聞「島津義弘　没後４００年」第一部「乱世に生まれ候」④⑤に詳述されているので、ここでは省略する。
いずれにしろ、一度は譲った領土や家督などを取り返す実力行使を中世、「悔返し」と呼んだそうだが貴久に本宗家家督を譲った忠兼（家久）の行動はまさにそれであった。
そして一回は本宗家の家督を取り戻した忠兼は大永２年（１５２７）勝久と名乗りを改めた。しかし、勝久に反抗する勢力も黙っておらず反乱を起こす。

それを見かねた日向の御一家・豊州家忠朝は、当家は破滅の危機にあるとのことで和平会議を開いた。しかし不調に終わり、秋には各地で争いが絶えなくなり、勝久の家臣を薩州家島津実久が殺害する事件も発生、二人の間は再び悪化する。ついに実久に敗北し勝久は各地を転々とする。最後は遠く豊後国（大分）に逃げ出した。
一方、実久の反撃を受けた貴久は父、」忠良のいる伊作へ退いた。しかし、伊作に確固たる勢力基盤を持つ忠義は近隣の反実久方の勢力を結集し反撃の機会を窺った。その第一歩は、天文２年（１５３３）の日置南郷城攻めだった。
実久方の城主、桑波田孫六が猟に出かけるという情報を得た忠良は猟師に偽装した兵を孫六の帰城に見せかけて入城させ、南郷城を落城させた。続いて伊集院の一宇治城を陥落させ、ここに本拠地を移し、天文１９年（１５５０）貴久・忠良父子は居城を鹿児島に移し、貴久は家督を譲られてから２４年目にして名実ともに島津家の当主となることができた。

〇戦国の興亡、人の運命は分らないもの人の命ははかないものであった時代に比べれば、現代は、という気分になることがあります。
思考力は衰えても、見えてくるものがあります。
次回はいつ．．．．その次回を書いてもその次はいつとなることでしょう．．．
西山 和宏

〇家久の死因??　　大石
日本史、世界史、もちろん中国史にも「なぜ？」「あの時もし？」などどの答えもそれなりの納得性があるものです。
でも真実は一つです。「なぜ」の答えは本人だってわからないことがあるのですから。
歴史をいろいろ詮索（推理）するのは楽しいです。
今日アマゾンから届来ました。読みかけの本が増えてます。トルコTRの本もまだ半分です。クルド人にも興味深々です。明日は黄興碑清掃の為南洲神社に行きます。黄興が 1909 年に西郷隆盛の墓地に詣でた時に詠んだ７言絶句の解釈がもめています。

〇大石くんの島津家へのはまり込みも本格的になってきましたね。
明日、明後日とも日中友好でいいことです。
　島津家の謎は桐野作人氏が１１個挙げていますが、まだまだ私が疑問に思うことはたくさんあります。一つ一つ調べたいものです。これだけでも面白いと思いますよ。
　私は明日は午前中はグラウンドゴルフ、午後は校区の武岡中が全日本吹奏楽演奏会で日本一の金賞を取って帰ってきて凱旋演奏会？　が宝山ホールであるので聴きに行きます。近所の子供も出ます。

〇真実と事実という問題もあります。
歴史の推理、豪傑、英雄を批判または再評価するのも楽しいものです。
この年になってくると見えてくるものがあります。
トルコは中国と並ぶ古典歴史の宝庫だと思います
木馬に騙されて滅んだトロイからビーナスの息子が落ち延び、地中海を漂い、流れ流れてローマを創ることになったとうろ覚えですが、間違っていたらごめんなさい。

かつてのオスマントルコ帝国、トルコ行進曲。
西郷隆盛に敬意を払った黄興碑清掃とはきっといいことがあります。
積善の家に必ず余慶あり。
西山 和宏

〇土曜日の朝はグラウンドゴルフで始まるので、今朝の新聞も見ないうちに家を飛び出しました。
帰ってメールを開けてびっくり、大石くんから「敵中突破」の記事が・・・。
私としては年末を控えているとは言え最終の「第５部」は、早くても１１月中旬頃からかなと思っていました。　慌てて読みましたが、そこにはいきなり「開戦」そして内容は「撤退」の文字まで出てくる早さ。ゆっくり読み進むとこれから２か月前の義弘の行動に遡る模様でホッ。
②の３０日からの展開を待ちましょう。
新聞は私たちの知らないことを伝えてくれるはずだと期待しています。
クマモト　タツオ
ttps://youtu.be/NeUs7YAsaRs
27 日、鹿大の中国人留学生を引率して『秋の薩摩路ツアー』でした。上クリック
朝送った動画は間違いです。上が本物バスツアーです。

YouTube 動画 中国留学生「秋色の南薩摩バスツアー』2019 をプレビュー

〇私も数年前に大石くんに誘われてこのツアーに参加して楽しい一日だったのを思い出します。
大石くん、今年もいいコースで皆さん楽しんでいますね。
指宿の「砂むし」は学生仲間では行く機会もないでしょうから大喜びだったことはよくわかります。

クマモト　タツオ

〇留学生ともなれば中国人の感じも随分と変わったものだと思います
大石さん　本当に良いことをなさっていますね！
指宿には、小学校３年ぐらいのとき午前５時台の列車で遠足に行ったと思います。
温泉は街中の銭湯で、お湯が足元の砂の間から湧き出てきました。
浜辺では、磯辺に四角い石を並べてその上に薬缶を載せてお湯を沸かしていました。
西山 和宏 mfikazu@tkg.att.ne.jptel 03-3814-0360

〇今日で(31 日)10 月もお終いです。最後の交信メールをお届けします。

○ 南日本新聞の 「島津義弘没後400年」もいよいよ最後の「関ヶ原」に入り、我々の義弘に対しての考察の楽しみも終わりが近づいてきました。今日の記事では島津義弘に関する大きな謎が出ています。私も前々から大きな謎だと思いその回答を見いだせないうちに今日の記事を読みましたが謎は深まるばかりの気がします。
　慶長5年（1600）6月、徳川家康が上杉景勝を反逆者として討伐することにし会津に出立するが、その前に島津義弘に対し「万が一の事態が起きた時には伏見城の守備にあたるように」と要請していた。その言葉（政権としての決定も書面もなかった）従って義弘は伏見城への入城を図ろうとしたが、家康から留守を任されていた鳥居忠元からそれを拒否された。

　鳥居は、義弘が敵なのか味方なのか、判断がつかず、しかも名高い義弘を入城させれば「庇を貸して母屋を取られる」のを恐れ入城を拒否したのではないかと、する説もある。（外川　淳、「島津の生き残りへの秘策を読み解く」）
鳥居からそう言われた義弘はなぜか「豊臣秀頼様のいる大阪に下るしかなかろう」と言ったというが、島津家を背負う一人である義弘がいとも簡単に引き下がったようにみえる。そればかりか、義弘は西軍の石田三成や毛利輝元、宇喜多秀家、小早川秀秋らと共に伏見城攻めに参加し奮闘した。私には理解できない転身である。その背景には何があったのか。

　西軍参加について、今日の記事に3人の評価があるが、私はどちらかといえば、桐野作人氏の「家中の事情」という説を取りたいと思う。
先日、福昌寺跡墓地を訪ねて義久の3女・亀寿の墓（鹿児島美術館の庭にある「じめさあ」像も亀寿）のことを取り上げたが、その亀寿は義弘の3男・忠恒の夫人である。この亀寿が上方で豊臣方の人質になっていたこともあり、これを義弘が助けることは兄・義久に忠節を尽くすことであり、そのことが忠恒の家督継承に欠かせないことだったという説である。
しかし、自分の中で反論も出てくる。そうであれば、初めは何故徳川家康に付こうとしたのか。
この記事のあと二つの説も、もう一つ説得力には欠けるような気がするが、どうだろう。

クマモト　タツオ

RE: 戦の勝敗は水物

○「この時、家康はわざと上方を離れて三成らを決起させ、一網打尽を狙ったというのが広く信じられている。」とありますが、戦の勝敗は水物、目論見通りにいかないものだと思います。
上杉征伐だけでも一大決心であったと思います。
三成をそこに勝機があると立ち上がった
時の最大権力者である家康に、関ヶ原合戦のようになる大きな賭けを行う必然性があったとは思えません。
義弘も手勢 200 ということは、当時、東西の勢力が激突とか戦雲たなびく状況ではなかったということでしょう。
三成は権力の回復を狙うチャンスを窺っていたと思います。
虚を突いて出たつもりでしょうが仕掛けで少し早かった。
上杉征伐の戦いが始まってからにすべきであったでしょう。

記事の中に「正規軍」とか「賊軍」という表現があるが特に「賊」とは山賊・海賊・盗賊を働く類の者たちを指す語であって、敵対者を「賊軍」と表現するのは安易で稚拙。
西山 和宏

〇家康の立場になって考えると、島津家は武勇に優れている、その領地は遠国であり孫子の兵法に従って遠交近攻で味方にした方が得だとそろばんをはじいた。
これは、島津にとっても同じと言えること。
家康から聞いていないものを伏見城に入れないのはだましも多い時代の戦国武将の心得。
少数の兵であっても、トロイの木馬になりかねない。
伏見城で断られたら西軍へは、「兵は拙速を尊ぶ」ということであろう。
急場でモタモタしていたら、両方から敵扱いにされ、身の置き所がなくなる。
付いた方で死力を尽くして頑張る、時には、親子・兄弟でも敵対して戦う。
関ケ原では真田親子兄弟がそうであった。
それが戦国時代であったと思う。
とまあ、単純に考えてみました。
西山 和宏